

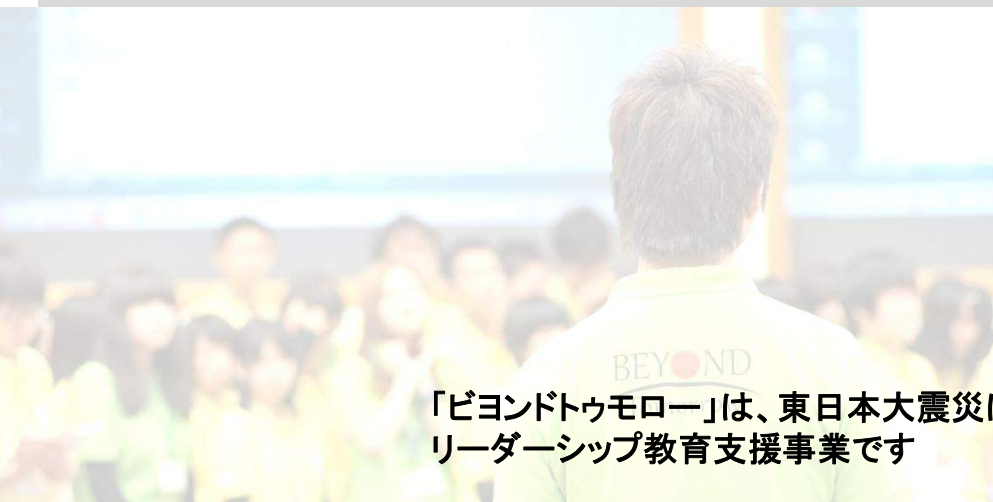
ビヨンドトゥモロー 東北未来リーダーズサミット2013報告書



2013年10月12日～10月14日

被災地発の未来のリーダーたちによる、東北の未来への提言

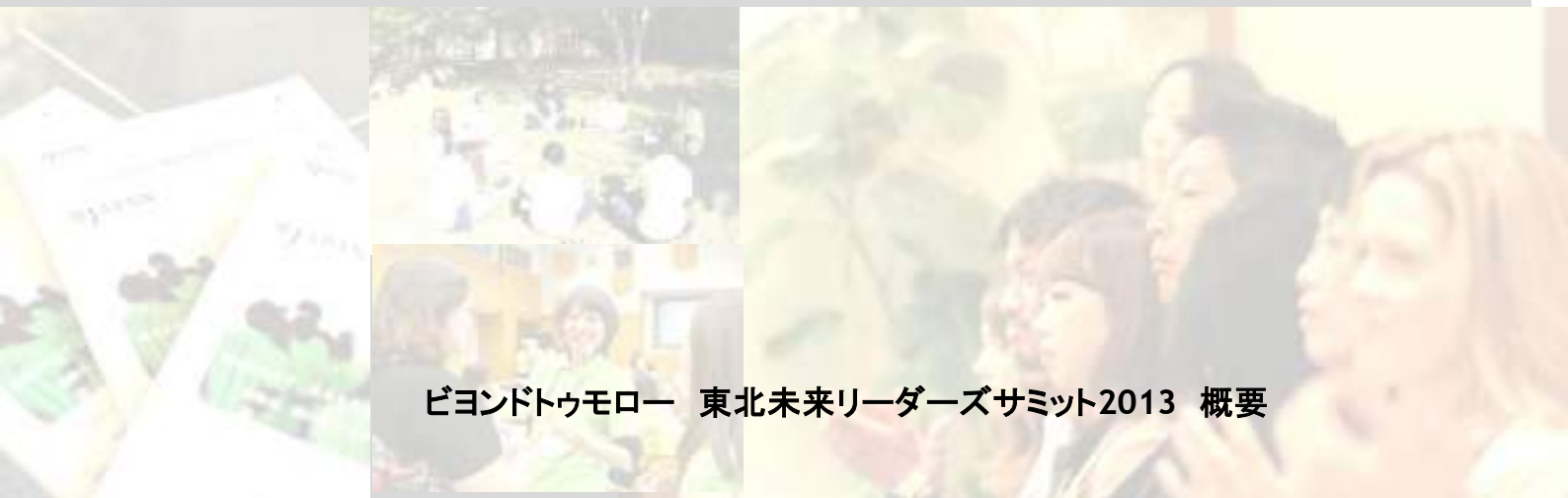
- 開催場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
- 主催：一般財団法人 教育支援グローバル基金
- 協力：ジャパン・ソサエティー



BEYOND

Tomorrow

「ビヨンドトゥモロー」は、東日本大震災により被災した若者の
リーダーシップ教育支援事業です



ビヨンドトゥモロー 東北未来リーダーズサミット2013 概要

主催	一般財団法人教育支援グローバル基金
協力	ジャパン・ソサエティー
日時	2013年10月12日(土)～14日(月・祝)
参加者	東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島いずれかの県に居住しており、震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち、国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生59名と、自らが岩手・宮城・福島いずれかの県で震災を体験し、ビヨンドトゥモローの活動に継続的に参加し、未来へ向かいそれぞれの社会的アクションを起こしている大学生22名。(選考により選出)
趣旨	<p>参加高校生、大学生の総勢81名は、様々な領域で活躍するリーダーたちによるアドバイスの下、東北の復興のあり方について11チームに分かれて政策を立案し、チーム毎に提言を策定しました。策定された提言は、参加学生代表によって安倍昭恵首相夫人の元に届けられました。</p> <p>震災・津波という困難を経験したからこそ、他者への共感をもって広く社会のために行動を起こすことができる人材が出てくるという信念のもとに、参加学生たちが共に逆境を乗り越えて果たすべき社会的な役割について考え、アクションに移すためのきっかけを提供しました。</p>

メッセージ

櫻井本篤

ジャパン・ソサエティー
理事長

“このサミットは東北の人たち自身が自分たちを助けるための第一歩ですが、復興には日本全体の協力も必要です。その過程で、皆さんの人格も育まれ、さらに今後の東北の復興に向けて良い知恵も出てくることでしょう”

全米で最大の日米交流団体であるジャパン・ソサエティーは、皆さんが参加したビヨントゥモロー東北未来リーダーズサミット2013の支援もさせていただきました。この支援のベースは、ジャパン・ソサエティーが震災の直後に創設した震災復興基金に対してこれまで集まった2万3000件の寄付、全米50州、さらに米国を超えた全世界50か国からの寄付です。これらはすべて、東北の被災地の皆様に対する善意と熱意を持って寄付をしていただいたものです。ぜひ被災地の若者の皆さんに、この善意をうまく活かし、様々な活動をしていただければと思います。

東日本大震災から来年の3月で3年が経過し、これから4年目に入ります。しかし、私が知る限りでは、東北の復興には難しい課題が多くあります。そのような逆境において、東北出身の皆さんが、現地の事情とニーズを踏まえ自分たちのビジョンを描き、そのビジョンに向けてアクションを起こすという非常に重要な節目に差し掛かっているのだと私は思います。この3日間の様々な対話やディスカッションは、東北の復興に向けて重要な意味を持っていると確信しています。

このビヨントゥモローのプログラムで私が非常に感心しているのは、各界のリーダーの方々が皆さんの指導者としてボランティアで参加して下さっているということです。これは普段の環境ではあり得ないことで、非常に稀有な例です。こういった立派なリーダーのご意見をよく咀嚼して、皆さん自身の人格形成に役立ててください。そして、東北の復興の役に立つアイデアを実行に移していただければと切に願います。

このサミットは東北の人たち自身が自分たちを助けるための第一歩ですが、復興には日本全体の協力も必要です。そしてその協力の先に国際的な視点を入れ、国際的な環境でどのように協力を仰いでいくかという視野の広いアプローチをしていただけると嬉しく思います。その過程で、皆さんの人格も育まれ、さらに今後の東北の復興に向けて良い知恵も出てくることでしょう。

このサミットが、皆さんの今後の人生にとって非常に良い訓練の機会となったのであれば、これほどに嬉しいことはありません。この機会を活かし、今後とも是非ご活躍いただきたいと心から願っています。

目次

1. メッセージ	03
2. プログラム概要	05
I. 参加学生紹介	07
II. 参加学生の声	09
III. スケジュール	11
3. 体験の共有	15
4. 東北の未来への提言	17
I. 現地の声・ニーズの理解	18
II. 東北復興の専門家へのインタビューセッション	19
III. 閉会式／最終提言発表	21
IV. 首相公邸での提言提出	25
5. 参加頂いた方々	26
6. メディア掲載	29
7. 合唱	30
8. 協力団体	32
9. ビヨンドトゥモローとは	33

東日本大震災から2年半の年月が経つ2013年10月―第3回目のビヨントゥモロー東北未来リーダーズサミットが開催されました。

未曾有の大震災から2年半、参加学生はそれぞれの2年半を歩んできました。

震災発生当時、中学生だった生徒は高校生となり、高校に入学したばかりだった生徒は後輩を引っ張る先輩となり、そして高校生だった生徒は大学生になりました。「被災地」で生きて来た者、地元を離れ他地域で避難生活を送る者、留学先で東北に思いを馳せる者。



高校生

東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島
のいずれかの県に居住しており、震災を
乗り越えてグローバルな視野を持ち国内
外で活躍するリーダーになることを志す、
書類選考で選ばれた高校生
59名

体験共有

東北未来リー

2泊3日にわたる、リーダー
分野と世代を超えて、全員
ジョン策定に臨みました。

サミットの目的

1. 「東北の未来への
2. 様々な領域で活躍
対話を通じた自らの
具体化
3. 志を共にする仲間
琢磨の機会

同志との出会い

リーダーとの 対話

提言アドバイザー

“未来の東北への提言”に向けて学生たちに
助言を与える、様々な領域の第一線で活躍中
のリーダーたち



ビヨンドトゥモローのスカラー生の多くが3回目の参加となり、事例研究として現実の課題と対峙します。

フェローズ生は、自分たちがこれまで先輩たちからそうしてもらったように、チームリーダーとして後進の育成にあたります。

そして高校生は先輩たちの大きな背中を追いかけ、本サミットに駆けつけたリーダーや専門家に自分たちの思いをぶつけます。

それぞれが、それぞれの思いを持って臨んだサミットは、まさに東北の未来のリーダーたちによる特別な空間となりました。

生きた者の使命

ダースサミット

シップ教育の機会。
が東北の未来のビ

提言」策定

するリーダーとの
将来のビジョンの

との議論による切磋

フェローズ

『ビヨンドトゥモロー東北未来フェローズ・プログラム』に参加する大学1年生11名が、高校生のチームにチームリーダーとして加わり、2泊3日参加高校生と向き合い、サポートしました。



スカラー

『ビヨンドトゥモロー・大学スカラーシップ・プログラム』に参加する大学2年生11名が、独自のチームを作り事例研究に当たり提言をまとめると共に、フェローズのアドバイザーとして後進の育成に臨みました。

2年半の歩み

専門家

学生が東北の復興を考える上で、各分野の第一人者から必要なインプットを頂きました。



プログラム概要

参加学生紹介

東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島のいずれかの県に居住しており、震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち、国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生59名と、自らも岩手・宮城・福島のいずれかの県で震災を体験し、ビヨントゥモローの活動に継続的に参加し、未来へ向かいそれぞれの社会的アクションを起こしている大学生22名が参加しました。

高校生参加者一覧(1/2)

氏名	学校	学年	氏名	学校	学年
岩手					
東紗希	岩手県立大槌高等学校	3	照井颯志	岩手県立大船渡高等学校	2
阿部祥子	岩手県立山田高等学校	2	仲口健	岩手県立岩谷堂高等学校	3
大村真奈美	岩手県立一関第一高等学校	3	長瀬幸太郎	一関工業高等専門学校	1
葉澤詩穂	岩手県立釜石高等学校	3	浜登美海	岩手県立釜石高等学校	1
川守田智美	岩手県立盛岡第二高等学校	2	早坂太希	東陵高等学校	2
黄川田あかり	岩手県立高田高等学校	3	藤井理子	岩手県立盛岡第一高等学校	3
佐々木真琴	岩手県立宮古高等学校	2	藤原奈々	岩手県立高田高等学校	2
佐藤明恵	岩手県立盛岡第三高等学校	1	前川未来	岩手県立釜石高等学校	1
関口琴乃	岩手県立宮古商業高等学校	3	吉田優作	岩手県立大槌高等学校	2
宮城					
石川理那	宮城県多賀城高等学校	3	高橋菜都美	宮城県本吉響高等学校	3
伊藤美沙	宮城県気仙沼高等学校	3	武山友樹	宮城県石巻商業高等学校	3
稲村ほのか	宮城学院高等学校	1	田畑祐梨	宮城県志津川高等学校	3
及川杜香	宮城県宮城第一高等学校	2	千葉有紗	宮城県石巻北高等学校	3
小畑綾香	宮城県多賀城高等学校	2	千葉奈央	宮城県仙台二華高等学校	3
亀谷菜里	仙台高等専門学校	3	永沼成省	宮城県石巻西高等学校	1
雁部善幸	宮城県石巻好文館高等学校	3	平塚奏流	宮城県仙台東高等学校	3
近藤佑太	宮城県名取北高等学校	3	福田栞	宮城県多賀城高等学校	2
佐々木亜輝	東北学院榴ヶ岡高等学校	3	藤田倫平	宮城県気仙沼高等学校	3
佐藤迅	宮城県農業高等学校	3	三浦亜美	宮城県気仙沼高等学校	3
渋谷駿	宮城県石巻商業高等学校	2	三浦真子	宮城県気仙沼西高等学校	2
鈴木啓介	宮城県塩釜高等学校	3	宗像健一郎	宮城県仙台第一高等学校	2
鈴木さくら	仙台育英学園高等学校	1	村上あずさ	宮城県気仙沼高等学校	3
高橋亜利沙	石巻市立女子高等学校	2	渡辺想	宮城県石巻北高等学校	2
福島					
新井裕理	東京都立墨田川高等学校 ※	3	高橋麗加	福島工業高等専門学校	3
鎌田葉月	神奈川県立横浜清陵総合高等学校	2	西村亮哉	福島県立安積高等学校	1
黒澤永	福島県立会津高等学校	3	根本匠	沖縄県立那覇西高等学校 ※	3
齋藤崇寛	福島県立双葉翔陽高等学校	3	橋本慧実	福島工業高等専門学校	3
坂本秀美	淑徳高等学校 ※	2	深谷華	仙台高等専門学校	2
鈴木千秋	福島県立いわき総合高等学校	2			

※ 福島より転出

プログラム概要

高校生参加者一覧(2/2)

氏名	学校	学年	氏名	学校	学年
ビヨンドトゥモロー 高校留学プログラム参加者					
菅原彩加	Leysin American School(スイス)	3	高橋奈々美	St. George's School(スイス)	2

大学生参加者一覧

氏名	在籍大学名	出身高校名
ビヨンドトゥモロー 東北未来フェローズ・プログラム2013 参加者(大学1年生)		
石川玲央	群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部	福島県立湯本高等学校
菅野英那	早稲田大学商学部	福島県立須賀川桐陽高等学校
北田亜央衣	帝京大学医療技術学部	岩手県立釜石高等学校
木村拓哉	東京大学教養学部	岩手県立盛岡第一高等学校
穀田龍二	東北大学法学部	宮城県気仙沼高等学校
佐久間楓	東北芸術工科大学芸術学部	石巻市立女子高等学校
佐々木沙耶	お茶の水女子大学文教育学部	岩手県立高田高等学校
佐藤主樹	東北大学文学部	宮城県仙台第二高等学校
佐藤慎	岩手医科大学医学部	岩手県立大船渡高等学校
高橋亜弓	上智大学外国語学部	仙台白百合学園高等学校
白河榮	東北大学文学部	福島県立会津学鳳高等学校

ビヨンドトゥモロー 大学スカラーシップ・プログラム 参加者

今井友理恵	慶應義塾大学法学部	岩手県立盛岡第一高等学校
遠藤見倫	石巻専修大学経営学部	宮城県石巻北高等学校
上澤知洋	東北大学農学部	岩手県立盛岡第一高等学校
菊池翔太	東北学院大学法学部	岩手県立大船渡高等学校
菊地将大	筑波大学社会・国際学群	岩手県立高田高等学校
倉本知邑	明治薬科大学薬学部	岩手県立盛岡第一高等学校
西城国琳	拓殖大学国際学部	宮城県気仙沼高等学校
佐藤滉	高崎経済大学地域政策学部	岩手県立盛岡第一高等学校
菅野翼	宇都宮大学国際学部	福島県立福島工業高等学校
千葉真英	慶應義塾大学総合政策学部	岩手県立大船渡高等学校
藤田真平	神奈川大学法学部	神奈川県立岸根高等学校

参加学生の声

参加学生の声を抜粋しました。

**千葉奈央**
宮城県仙台二華高等学校

東京駅までのバスの中でもディスカッション。新幹線の中でもディスカッション。家に帰って親とも1時間ディスカッション。こういうディスカッションをする機会が増えるといいな。たくさんの「反省」があった。でもそれを「後悔」と言う人もいれば、「課題」と言う人もいた。人によって見方が全然ちがう。やっぱりディスカッションっておもしろい!!

葉澤詩穂
岩手県立釜石高等学校

東北未来リーダーズサミットに参加して、また1つ自分のステップアップになったと思う! 同じような気持ちを持った人が集まるからこそ学校では話せないことも共有できたのかな。プレゼンしてみても発信する事に自信を持てるようになったし3日間とっても濃い日を過ごせました。

**雁部善幸**
宮城県石巻好文館高等学校

終わってしまった感が心に突き刺さる。前回もだけどこんな短期間で仲良くなれる人なんて、他にはまったくない。前回のサミットの後は自分から動きだそうだなって考えてなかった。でも今回は違う。動かなきゃいけない時が来たのだと思う。

自分にできることは少ないだろう。でもそのちょっとした動きが蝶の羽ばたきが風となり気流となり、気象に影響を及ぼすように大きなものになればとても嬉しい。高校生としてビヨンドに参加できる機会はもうなさそうだけど、大学生になってもどこかで関わっていきたく強く思った3日間でした。

鈴木千秋
福島県立いわき総合高等学校

今まで漠然にしか考えられてなかったけど、ビヨンドに参加してもっと地元の子に夢を与えられるようになりたい、伝えていきたい、沢山の経験・体験をさせたい、それができる何かをしたいって思った。少しは具体的になったけど、まだまだだから今度はその何かを考えようと思う。

**新井裕理**
東京都立墨田川高等学校

私自身、ビヨンドとの出会いは去年のサミットの案内が学校に届いたことから始まりました。二度とない素晴らしいこのサミットに参加したい! と記入したのは良かったものの、書類を受け取ったのが遅く、結局締切日が過ぎて応募が出来ず、苦い経験をしました。しかし、今年は見事サミットに参加することが出来ました。本当に有意義に過ごすことができ、人の輪が広がったことや視野が変わったこともありましたが、何よりあの日同じ苦しみを経験し、そのことを共感できる仲間達と復興について考えプレゼンを行うことの楽しさと充実感・自分達の手で本当に実行したい! という強く思う気持ちを知ることが出来たことが、私の中でサミットに参加して一番得られたものなんだろうと思います。

**浜登美海**
岩手県立釜石高等学校

震災発生時から自分の被災体験を他の人に話したことはなかった。きっと、私の気持ちは誰も理解してくれないと思っていた。しかし、ビヨンド tomorrow には同じように辛い経験をしながらも、自らの体験について勇気をもって発信している人がたくさんいた。初めて私の気持ちを理解してくれる人たちに会えたような気がして嬉しかった。自分もいつまでも震災を避けてはいけけない。後世に伝えられるように、自分の体験とちゃんと向き合い、もっと発信していきたいと思うようになった。

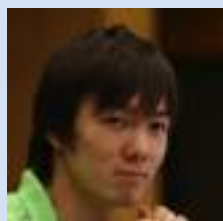
**仲口健**
岩手県立岩谷堂高等学校

このサミットで、初めて自分の震災の体験を話した。震災の経験は、自分の中に閉じ込めておこうと思っていたことだった。しかし、自分よりも辛い思いをしている仲間が堂々と自らの体験を語っているのを見て、自分もいつまでも閉じこもっていないで、表現しなくてはいけないと思うようになった。



高橋奈々美
St. George's School (スイス)

今回のサミットは自分にとって、第1回サミットでビヨンドに出会ってからの2年と成長を振り返る転機だった。2年経った今私は高校3年生となり、今の大学生スカラーの当時の姿と重なった。当時のスカラー生達と同じ土俵に立てたかという自分では分からない。震災直後の2年前とは状況も起きている問題も違う。既にある仲間のつながりや慣れもある。ただあの体験共有の場が今まで、その後の日々の思考や物事を見る視点や他者との関わり方に革命的な影響を与えたのは事実。



菅野英那
早稲田大学商学部 1年

今回のサミットで感じたのは、スカラー生たちは先駆者で、自分たちフェローズ生は彼らの背中を追っているということ。今回スカラー生は一つ上の課題に取り組んでいて、先駆者だと思った。それと同時に、スカラー生が悩んでいる様子を見て、一緒に成長する仲間なんだと思った。

上澤知洋
東北大学農学部2年

ビヨンドらしさというのは、議論のときに極限まで頭を使っている状態だと思う。わけわからなくなるぎりぎりのところで大変だけど、それが楽しい。一人一人に関連していることを話すからそういう真剣さが出てくるのだと思う。今回も参加して本当によかった。

白河榮
東北大学文学部1年

海外のプログラムに参加して発信できるようになった人がいるのを見て、これまで発信できなかった人が刺激をうけ、発信できるようになったのは大きな一歩だった。そういう場に立ち会えたことがとても嬉しかった。



佐藤迅
宮城県農業高等学校

震災後最初の時期は何も言いたくなかったし、しゃべりたくなかった。しかし、この夏ビヨンドのプログラムで米国に行き変わった。スピーチの準備をしているとき、震災を思い出し、辛かった。でも、先輩たちが励ましてくれた。自分が元気がない時には誰かが笑わせてくれた。

そうやって、辛い時に一緒に笑っているときは、一瞬でも辛いことを忘れることができた。自分も、人の痛みを和らげられるような存在になり、恩返しがしたいと思った。だからサミットにも来た。サミットを通して、自分の意見を伝えたり、何か得るものがあるれば、一人一人にとって意味のあるものになるのだと思う。

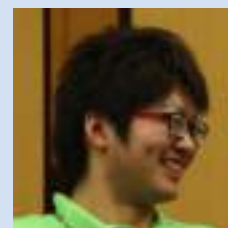


今井友理恵
慶應義塾大学法学部2年

今回のテーマが難しかったが、やりがいのある・意味のある提言作成ができた。1年目のサミットは初めてで、ビヨンドが何なんかわからなかった。2年目は後輩が入ってきてどうまとめるかを悩んだ。そして3年目になり今回は「人が人を育てるためのサポート」。今回は自分たちがチームリーダーを支える番だった。人をマネジメントする面も増えてきて、難しかったが有意義で楽しかった。

佐藤 混
高崎経済大学地域政策学部2年

初回サミットと自分が明らかに変わったと思うのは、誰かが真剣に話をしている時に、その話を真摯に受け止められるようになったこと。ただし、それにリアクトするためには自分自身成長し続けなければ。このふたつは車の両輪のように大切にしていきたい。



菊池翔太
東北学院大学法学部2年

提言発表会の前日、現実世界がもつ制限にぶつかり、困難に直面した。そのとき、その困難に立ち向かい行き詰まった社会を変えるのか、それとも、行き詰まったら違う方向に進路を変えるのかの選択を迫られた。そして、みんな前者を選んでいった。それがビヨンドだと思った。

高校生は、ただ純粋に東北をどう変えたいかということを考えていた。1回目のサミットに参加したときは、自分が単純に東北をどうにかしたいという気持ちで参加したので、その気持ちに帰った。

プログラム概要

スケジュール

10月12日(土)

16:30～17:00 オリエンテーション・自己紹介・諸注意
 17:00～18:00 アイスブレイキング
 18:00～19:00 夕食
 19:00～21:00 ビヨンドトゥモローナイト(ビヨンドトゥモローとは・体験共有)
 21:00～21:30 合唱練習

10月13日(日)

7:00～ 8:00 朝食
 9:00～ 9:30 合唱練習
 9:30～10:15 ビヨンドトゥモローとは
 課題発表・プレゼンテーション作成のガイダンス
 (ディスカッション)自分たちがみたい東北の姿・現地のニーズ理解・課題の抽出
 11:30～12:30 昼食・休憩
 12:30～12:45 (レポートバック)私たちの考える東北の課題
 12:45～13:15 インタビュー準備
 13:15～14:45 専門家インタビュー —講師:
 木山啓子 特定非営利活動法人ジェン (JEN) 理事・事務局長
 糸井重里 コピーライター/ほぼ日刊イトイ新聞主宰
 渋谷健 コモンズ投信株式会社 会長
 公益財団法人日本国際交流センター 理事長
 石渡正佳 千葉県県土整備部河川環境課河川海岸管理室長

15:15～16:15 (ディスカッション)プレゼン内容仮案作成
 16:15～16:45 中間発表
 16:45～18:15 (ディスカッション)最終プレゼン内容作成
 19:15～21:15 ウェルカム・ディナー

10月14日(月・祝)

7:00～8:30 朝食
 8:30～9:30 合唱練習・プレゼン練習
 10:15～10:40 発表会リハーサル
 11:00～12:30 提言発表会
 12:30～14:00 フェアウェルランチ









体験の共有

東日本大震災からもうすぐ3年。

このサミットに東北の学生が集まった意味は何なのか。

震災について語る必要はあるのか。

「被災者」「非被災者」関係なく復興について考える意味は何なのか。

参加学生一人一人がそれぞれの「2011年3月11日」に思いを馳せ、自分の体験と向き合いました。仲間の体験に耳を傾け、受け止め、共感した、特別な空間がそこにはありました。

ビヨンドトゥモローナイトでのパネルディスカッション

“本音で話してくれと言われても、最初は何を話したら良いのか分からないと思う。みんな何をどこまで言っているのか分からない。そんな状況で、沈黙もあると思う。でもそれは「意味のある混沌」。答えを出すためではなく、思いを共有するためのディスカッション。頭の中に思い浮かんだフレーズから話してほしい。思ったことを話すのは怖いけど、そこから始めるのが大切だと思う。”

千葉真英

慶応義塾大学総合政策学部1年・岩手県立大船渡高等学校卒業



“自分は内陸で地震に遭ったが、被災地のために何かをしたいと思いサミットに参加。そこで出会った友人は両親を亡くしていた。それまでは、マスメディアを通して「知っていた」はずの震災が自分に迫ってくるのを感じた。参加した後、自分は被災していないが、自分の近くに「被災者」がいることで、100%その人の気持ちはわからないが、学ぶことが大きかった。それがあつたからこそ、いま被災地のために何ができるか考えている。そういうことが、このサミットではできる。何を話したら良いか分からないかもしれないけど、それを乗り越えると得られるものがある。”

上澤知洋

東北大学農学部2年・岩手県立盛岡第一高等学校卒業



“私は震災後に故郷の気仙沼を離れ、大好きな水泳を続けるために単身で神奈川の高校に転校した。そこで、宮城と神奈川のギャップに戸惑った。神奈川にいと、本当は震災なんかなかったんじゃないかと思うような平和な空気が流れていた。夜になると家を失くしたことを思い出し、地元気仙沼に戻り、地元のために何かしたいと思った。2ヶ月しか被災地にいなかった、こんな自分がサミットに参加して良いのか分からなかった。でも自分が参加することで、他の似た境遇の人に良い影響を与えられると思った。避難先では話せないような話をすることができた忘れられない2泊3日になった。”

藤田真平

神奈川大学法学部2年・神奈川県立岸根高等学校卒業



体験の共有

“伝えるのが辛くても、震災の被害を受けた自分たちだからこそ、被害に遭わなかった人や未来の人のために震災のすべてを伝えていく使命がある。そのことを強く決意した。ビヨンドトゥモローという存在は、私にとって革命だった。”

お母さんありがとう。私はいま一生懸命生きています”



佐久間楓
東北芸術工科大学芸術学部1年
(石巻市立女子高等学校卒業)

“ってきます。”
これで最後だなんて思いもしなかった。

3月11日の朝、朦朧とした意識の中で母を見た。
職場である保育所に行く後ろ姿だった。眠気に負けた私は何も言わず、母は家を出て行った。
何でもない日常。いつものように支度をし、いつものようにバイトへ向かった。

バイト先で揺れを感じた。またいつもの地震か—そう思った。次の瞬間、ドンという音とともに体験したことのない揺れを感じた。なんだかとてつもなく長い時間のように感じた。今までとは違う—直感した。

3月にしては珍しい雪。吹きつける北風。
屋上に避難した全員が、厳しい寒さに震えた。

何が起きているか、分からなかった。
確かなのは、津波がものすごい勢いで街を襲っているということ。それは、変わらないと思っていた日常が変わっていく瞬間だった。

朝が来て、自宅に戻った。皆が待つ自宅に。
家は昨日とは何一つ変わっていないようだった。
まるであの出来事が最初からなかったかのようだった。

ある違和感に気づいた—家の中に母だけがいなかった。母はまだ帰ってきていなかった。「しっかりした母のことだから保育所の人と一緒に避難しているだろう。」
私も家族も疑わなかった。

ある日、父が神秘的な顔で帰ってきた。
嫌な予感がした。
「・・・が遺体で見つかった」
あまりよく聞こえなかったが、脳裏に母の姿が浮かんだ。

玄関に見知らぬ紙が置いてあった。
死亡証明書—それは母の死を告げる紙だった。

嘘だと思ったかった。
何かのドッキリであって欲しかった。
しかし、一枚の紙に書かれていたことは、変えることのできない事実だった。

このような悲しい出来事を繰り返したくない。そのためには、人々の感情に訴えなくてはいけない。震災のことを「出来事」だけではなく、感情面も後世に伝えていきたいという目標がいつからか芽生えた。そうは思ったものの、くすぶったまま時間がかりが過ぎていった。

そんなある時、先輩から東北未来リーダーズサミットについて聞いた。参加して自分と同じ思いを持った高校生と関わりたい—そう思った。
それで参加したのが、昨年のサミットだった。

震災から時間が経つにつれ、自分の周りが震災のこと—あんな辛いこと—をもう思い出したくないという雰囲気漂っていた。

聞きたくない。話したくない。もういやだ。
何となく震災のことを話すのはいけないことなんだと思うようになっていた。

自分自身も震災のことを話すと、母のことで気を遣わせてしまい、気まずい空気にさせてしまうことがよくあった。申し訳なくて話すのをやめてしまっていた。

しかし、サミットは違った。仲間や様々なリーダータチと出会い、震災のこと、地元のこと、復興のことについて熱く話すうちに、自分の心の中でのわだかまりが晴れていった。自分の心の中にあった熱い思いが復活していくのを感じた。

伝えるのが辛くても、震災の被害を受けた自分たちだからこそ、被害に遭わなかった人や未来の人のために震災のすべてを伝えていく使命がある。そのことを強く決意した。ビヨンドトゥモローという存在は、私にとって革命だった。

感情を伝える方法で何がいいのだろう。そう考えるうちに、アートのメッセージ性に注目した。
しかし、自分には絵をかける技術もなければ才能もない。今、自分に出来る表現はなんだろう。
そう考えるうちに、母が書いていた詩を思い出した。言葉による表現だったら私でもできるかも。
そう思い、言葉での表現で震災のことを発信するようになった。

震災からもうすぐ三年。
自分たちを取り巻く環境がめまぐるしく変わっていくのと比例し、震災の記憶の風化も進んできている。何を伝えるべきか。何でもかんでも風化させないということではない。事実の取捨選択が必要になったと思う。

私は一番の理解者の母を失った。
でも、それ以上に私はたくさんの人に出会い、成長することができた。

お母さんありがとう。
私はいま一生懸命生きています。

私は進み続けなければいけない。
進まなければいけないんだ。

東北の未来への
提言

プログラム2日目の朝、提言の課題が発表されました。

『地域社会参加型の復興』—東北の復興とは、行政に関わる一部の大人だけで作るものではなく、そこに住む子どもから大人までが、自分がどのような街に住みたいかを考え話し合い、復興に向けた活動に積極的に関わっていくことが大切です。今回のサミットでは、そのような「地域社会参加型の復興」がどのようにしたら実現できるのかを話し合い、提言にまとめます。

提言発表会で、ゲストによる投票を行い、最も得票数の多かった優勝チームは安倍昭恵首相夫人によって首相公邸に招かれ、提言を届けます。

- 魅力ある街づくり

仮設・公営住宅、高台移転、沿岸部の土地利用など、地域が抱えるハード面の課題と、コミュニティのつながりづくりなどのソフト面の課題を乗り越え、魅力ある街をつくるための提言を作成。

- 東北からの発信

日本社会が東北の復興に効果的に取り組めるよう、また世界が東北の経験から学べるよう、震災の経験や教訓、復興の現状を、どのように東北から発信していくことができるか、提言を作成。

- 世代を超えた協働の場

東北の復興のために、政府、民間、学校、地元コミュニティなど、あらゆる関係者が世代を超えて、共に活動していく場・関係を作るには何が必要か、提言を作成。

- 「地域社会参加型の復興」の事例研究：防潮堤建設計画

岩手、宮城、福島3県の沿岸で進んでいる、津波防災のための防潮堤建設プロジェクトについて、そのメリット・デメリットを整理し、どのように地域住民の意見を取り入れられるか検証し、提言を作成。

東北未来リーダーズサミット2013開催に際して、安倍昭恵首相夫人より、学生に激励のお手紙を頂戴致しました。

ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット2013へのメッセージ

本日のビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット2013に、東北被災地を代表する高校生・大学生である皆さんが集結したことを喜ばしく思っております。今年の3月に、スプリングプログラムで初めてお話を伺いましたが、それぞれ大変な経験をしながらも、自分たちで未来を作っていくという熱い志に心から感銘を受けました。

震災から2年以上経ちましたが、東北の復興にはより長い目でみた取り組みが求められています。東北の未来を担うのは、若い世代の皆さんであり、皆さんにこそ、復興の当事者として、リーダーシップを発揮していただきたいと考えています。

復興には、高台移転、防潮堤計画、復興道路の建設など、様々な課題が山積していますが、そういった様々なテーマについて、皆さんが提言をまとめるというのは大変素晴らしいことです。私も皆さんの意見を聴けることを楽しみにしています。

14日の提言発表会に伺えないのはとても残念ですが、優勝チームと、事例研究を行う大学生のチームからは後日、その提案を伺うべく、公邸にご招待したいと考えています。

東北の未来を担うのは皆さんです。この3日間、ぜひ精一杯考え、話し合い、明るい未来につながる提言作成にとりくんでください。

東北未来リーダーズサミットの成功を心より祈っております。

安倍昭恵

東北の未来への
提言

ステップ① 現地の声・ニーズの理解

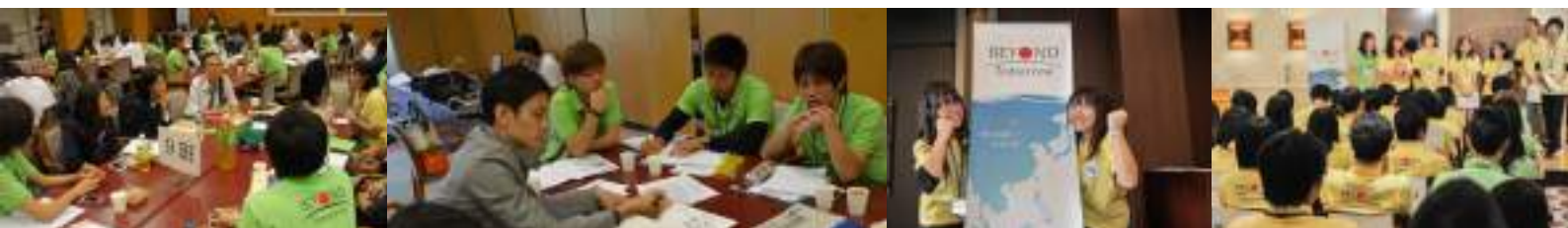
参加学生は、東北の未来への提言策定に向け、現地のニーズを把握することから始めました。東北で何が求められているのか、本当に必要な政策とは何か。

事前に周囲にいる3人にインタビュー調査を実施した参加学生たちは、その結果をチーム内で共有し、議論を深めました。

時の経過と共に刻々と変わっていく被災地のニーズ。参加学生は、現地の声と自らの体験を元に、震災から2年半が経つ今、東北被災地で何が求められているのか議論しました。

共有された現地の声 (抜粋)

- 被災遺物の保存がないことが課題だと感じる。東北には、広島の実験ドームのようなものが残っていない。被災遺物がなく、50年後、100年後の未来に何が残せるのだろうか。私たちは震災と向き合い、未来に伝えていく義務がある。それを達成するためには、象徴となる遺物が必要だと思う。
- インタビューで分かったのは「被災者」であっても同じ思いを持っているとは限らないこと。住民のニーズを反映させるべきだという人もいれば、反映させるべきではないという人もいる。こう考えると単に住民の声を全て取り入れることが最善ではないように感じる。幅広い考えを持った「被災者」の声を反映させるのは実に難しい。政治家が決めるのではなく、住民自身に決める余地を残すことも考えても良いのかもかもしれない。
- 私は、原発事故の影響で今は東京で暮らしている。被災された方の多くは、私のように全国あるいは世界中へバラバラになって暮らしている。私と同じ出身の友人と話していても、「町には帰りたいけど、帰るつもりはない」とよく聞く。町の未来を作るためには、町民の町離れを防ぐことが求められている。
- 岩手沿岸の山田町で、高校生、仮設住宅に住む高齢者、行政職員の方にインタビューをしたところ、町民側と行政側に考えの違いを感じた。町民は、自分たちの意見が復興計画に反映されていないと答え、行政側は町民の意見を十分に反映していると考えているようだ。これでは、行政側の努力が水の泡となってしまうだけでなく、町民の不満は増すばかり。会議室ではなく、現場でお互いの意見を交わすことが必要だ。
- 仙台の街で「仙台はもう好景気。復興景気」と他の地域の人が言っているのを聞いた。自分は仙台市民だが、複雑な心境になった。確かに、内陸部の中心は震災前の元通りになっている。しかし、被災した沿岸部は今でも震災の爪痕が残ったまま。そのような問題をよそに、「好景気」と伝えられたら、本来被災地に回すべきはずの支援も回らなくなってしまわないかと不安になった。
- 仮設住宅では、「早く出たい」という人もいれば、「まだここにいたい」という人がいた。その双方の意見をどう復興計画に反映させるかが難しい。
- 震災から2年半も経っているので、そろそろ行政が理念的な目標ではなく、具体的な場所・数値的な目標を提示する必要があるのではないかと。私が住む気仙沼では、理念的な目標は提示されているが、具体的にどの土地を何に利用して、道路をどのくらいの幅でどこに通す、というようなことが決まっていない。「何」を復旧するのか、だけでなく、「どのように」復旧するのかを示してほしい。
- インタビューを通して気づかされたのは、家が流された人も流されていない人も平等の発言力を持つべきだということ。被災者というのは、家を流された人に限らず、その土地に住む人であれば、物理的・経済的に何らかの被害を受けている。被災地は「そこに住んでいる人みんなのもの」であるので、ある種類の人の意見だけ聞きすぎることをないように注意すべき。



東北の未来への
提言

ステップ② 東北復興の専門家へ

ステップ② 東北復興の専門家へのインタビューセッション

自らの体験や、現地の声から明らかになった被災地での課題。
これらの課題を解決するべく必要な施策とは何か。

東北の復興を考える上で、各分野の第一人者から必要なインプットを頂きました。魅力ある街づくり、東北からの発信、世代を超えた協働の場、そして『地域社会参加型の復興』の事例研究「防潮堤建設」についてのインタビューセッションです。

魅力ある街づくり

“多様な意見をまとめるには、当事者が当事者意識をもって意見をまとめていかなくてはいけない。コミュニティの人が自分で自分の生きる道を選ぶことができることが一番大切。その人たちを巻き込むためには、徹底的に話し合うこと。支援する人はあくまでも「促進者」。放っておいても人間は潜在的に自立する力を持っている。そのプロセスを少しでも短くできるようにすることが支援する側の役割。”



木山 啓子
特定非営利活動法人ジェン(JEN)
理事・事務局長

1994年、JENの創設に参加。紛争中の旧ユーゴスラビア地域代表として難民・避難民支援活動に従事。多くの緊急支援が依存を生むことに着目し『緊急事態からの自立支援』を提唱する。これまでに20に及ぶ国と地域で支援活動を展開してきた。現在JENは、アフガニスタン、パキスタン、イラク、スリランカ、南部スーダン、ハイチ、東日本で支援活動を実施、2012年からは、シリアからの難民の支援活動もヨルダンで実施している。2007年よりJANIC理事。2011年4月よりジャパン・プラットフォーム共同代表理事。2005年エイボン功績賞受賞、日経ウーマン誌ウーマン・オブ・ザ・イヤー2006大賞受賞。

東北からの発信

“皆、「伝えること」に一生懸命になりすぎている。伝える「前」にあるものが大切。あなたが震災について、どんな考えを持っているのか、どういことを真剣に取り組んでいるのかということが、人は興味があると思う。あなたが「伝えること」以外で何をしているかということが問われる。そこにもっと重心を置くことが大切。”



糸井 重里
コピーライター／ほぼ日刊イトイ新聞主宰

群馬県生れ。1975年TTC(東京コピーライターズクラブ)新人賞受賞。1980年代に「不思議、大好き」「おいしい生活」などの名コピーで一世を風靡。コピー制作、作詞、ゲーム制作、文筆など幅広い分野で活躍を続ける。1998年には「ほぼ日刊イトイ新聞」(略して『ほぼ日』)をインターネット上に開設。和田誠さんと糸井の共同編集で『土屋耕一のことばの遊び場。』が発売されたばかり。

のインタビューセッション

学生たちは、専門家にぶつける質問を事前に話し合い、それぞれの分野の核心に迫りました。学生からの鋭い質問と、それらに答える専門家。将来の東北のリーダーと専門家との真剣勝負がそこにはありました。

東北の復興において第一線で活躍される専門家をお呼びして、専門家的見地から最新の状況や真の課題について、参加学生自身がインタビューを実施しました。

世代を超えた協働の場

“大人には「政府が」「企業が」何かやってくれると思っている人たちが多く、「自分たちで」ということを考えている人が少ないのかもしれない。高校生たちが、社会課題の解決に向けて率先して行動している姿は、大人たちに気付きや勇気を与えてくれる。今の世代より未来の世代が良くあってほしいというメッセージは、立場に関係なく共感されるメッセージ。だから、次の世代の皆さんが自発的に動いているということは、共感を呼ぶ。これが皆さんの一番の武器になるかもしれない。”



渋澤 健

コモンズ投信株式会社 会長 公益財団法人日本国際交流センター 理事長

1961年3月生まれ、1969年 父の転勤で渡米。1983年テキサス大学 BS Chemical Engineering 卒業。1984年(財)日本国際交流センター入社。1987年UCLA大学MBA経営大学院卒業。1987年ファースト・ボストン証券会社(NY)入社、外国債券を担当。1988年JPモルガン銀行(東京)を経て、1992年JPモルガン証券会社(東京)入社、国債を担当。1994年ゴールドマン・サックス証券会社(東京)入社、国内株式・デリバティブを担当。1996年ムーア・キャピタル・マネジメント(NY)入社、アジア時間帯トレーディングを担当。1997年東京駐在員事務所設立。2001年シブサワ・アンド・カンパニー株式会社を創業し、2007年コモンズ株式会社を設立(2008年コモンズ投信へ改名し、会長に就任)。2012年公益法人日本国際交流センター理事長に就任。

「地域社会参加型の復興」の事例研究:防潮堤建設計画

“日本では、アメリカのように住民がどのように参加するかが法律で決まっていないため、住民の声を反映させることは難しい。防潮堤建設など、人命にかかわることで、住民の合意形成まで5年、10年と待つことはできないため、行政によるトップダウンで建設計画が進められてしまう。住民の合意形成を待つということは、日本の制度上難しいのが現状。ただ世界にはうまく住民参加を取り入れている事例もあるため、将来的に日本の制度を変えていくことで住民参加を取り入れることは可能。”



石渡正佳

千葉県国土整備部河川環境課河川海岸管理室長

1981年千葉県入庁。1996年から、産業廃棄物行政を担当し、産廃Gメン「グリーンキャップ」の創設にかかわった。2001年全国でも最大級の不法投棄常習地帯といわれた銚子地域の監視チームリーダーとして、短期間で同地域の不法投棄ゼロを達成した。2002年11月「産廃コネクション」(WAVE出版)を出版。その前後から、不法投棄撲滅のための講演活動を全国的に展開し、経済産業省廃棄物・リサイクルガバナンス検討委員会委員、早稲田大学大学院非常勤講師、日経BP社環境経営フォーラムアドバイザーなどを歴任。

閉会式／
提言発表会

最終提言発表

「被災者」も「非被災者」も一緒に東北について考え行動していかななくては、本当の復興にはたどり着けないんだーそんな思いを胸に始まった2泊3日のプログラム。それぞれに違う3月11日を経験し、それぞれに違う2年半を歩んできた参加者学生たち。互いの気持ちを、分かり合いたいけれど分かり合えない。それでも理解したい。

最終提言発表内容 最優秀チーム
テーマ:『Living Museum』(チーム5)

私たちは、震災の教訓を次の世代に伝えていかなければならないと思います。こんな辛い経験を次の世代にはしてほしくない。歴史を語るのが下手だと言われる日本が、今回の震災の経験や教訓を長く後世に伝えていくためには、建物など形あるものとして残していくことが大切だと思います。しかしよく考えてみると、東北には象徴するものがないと思います。震災の遺構として残すべきか議論されているものもありますが、気仙沼の共徳丸のように、既に解体が始まっているものもあります。

私たちが提言するのは、2017年までにLiving Museumを建設することです。このミュージアムは、地震や津波の疑似体験ができたり、被災者の方の体験を生々の声で聞く機会をつくることで、震災を資料として「見せる」だけでなく、来場者に実体験として「感じてもらう」経験を提供することができます。このミュージアムは、設立当初から同じものを提供し続けるのではなく、その時代に合った内容をどんどん提供し進化していくような“Living”ミュージアムにしたいと思います。

これをやるのは、「いつか」ではなくて「いま」。「他の誰か」ではなく「自分たち」。ここにいるみんながだったら、実現することができます。皆さん一緒に、私たちの声を反映させて、日本をチェンジさせていきませんか。

復興計画における行政と地域住民の合意形成について、防潮堤建設を事例に研究することになりました。しかし、専門家とのインタビューを通して、防潮堤建設における合意形成は法や制度に深く関わっており、予想以上に困難な課題であるという現実を知りました。これまで、何度も提言策定を行ってきた私たちですが、初めて現実の厳しさに直面した経験でした。

事前アンケートから、地域住民の声が復興に活かされていないということが分かりました。この理由を考えると、現在、行政と地域住民の関係が立軸にあることが挙げられます。そこで私たちは、行政と地域住民が思いを共有し、意見をぶつけ合う場『SCサミット』を提案します。

社会課題の解決にむけたプロセスで望ましくないのは、お互いがそれぞれの利害を優先し、意見をぶつけ合うことです。このサミットでは、住民が集団となることで行政が無視できない力となり、さらに、行政の職員と思いを共有することで内部から自分たちの民意を反映させてもらうことができます。このように「内側から」自分たちの意見を反映させていくことで、徐々に社会に自分たちの意見が反映されていくのではないかと思います。

最終提言発表内容 大学生事例研究チーム
テーマ:『地域社会参加型の復興一防潮堤建設の事例』

最終提言発表

決して楽しいことばかりではなかった。時にぶつかり、もどかしく、悔しい思いもした。それでも、一つの目標に向かって力を合わせて提言を作成し、提言発表会で提言を発表する姿は、友人や先輩・後輩という枠を越え、東北を本当に良くしたいという思いで結束した「同志」そのものでした。そしてそれぞれの提言は、3日間だけでなく、2年半という年月の集大成のようでもありました。未来のリーダーとして提言を発表する参加学生、そしてその思いを真剣に聞く各界のリーダーたち。会場は熱気と未来への希望に包まれました。

高校生の10チームのプレゼンテーションは、ゲストとして会場にお越し頂いたリーダーたちによって評価され、投票によって最優秀チームが選出されました。

評価の視点

- ・ 東北被災地にいる自分たちならではの視点が入っているか。
- ・ 具体性はあるか。
- ・ 海外からの知見や、スピーカーからの学びなど、外部インプットが盛り込まれているか。

講評

竹中平蔵
慶應義塾大学教授 グローバルセキュリティ研究所所長

本日は、東北未来リーダーズサミットなので、皆さんはリーダーです。リーダーとして、今後さらに辛い思いを敢えてして頂きたいと思っています。リーダーは辛いんです。でも皆さんが辛い思いをして、それを乗り越えてきたからこそ、新しいリーダーになれる。「逆境は新しいリーダーを創る」というのが、ビヨンドトゥモローの一つのテーマにもなっていますが、そのことにも思いを馳せて頂きたいと思っています。



票投票す

リーダーというのは常にリスクに直面します。何かやろうと思うと、必ず反対論が出ます。その反対論を押さえながら、自らのリスク管理をしながら、しかし全体を引っ張っていかなくては行けない。「改革者は皆不幸である」というゴルバチョフの言葉があります。今までやったことのないことをやろうとすると、最初は「そんなことできかないから止めろ」と色々な批判をされる。しかしそこに道ができてしまえば、その道を開いた人の苦労を誰も顧みず、当たり前のように皆がそこを通って行く。それがリーダーであり、改革者です。私は皆さんに、誇りを持って、胸を張って、そんなリーダーになっていただきたいと思います。



閉会式／
提言発表会

学生代表スピーチ



“私は、これまで母の死について、ずっと後悔して生きてきました。しかし、今ここに「ないもの」を追いかけるのではなく、今確かに「あるもの」に感謝し、これから「生まれてくるもの」を信じて生きていきたいと思えるようになりました。”

佐藤 迅 宮城県農業高等学校3年

東日本大震災が発生する数週間前、高校入試がありました。3人兄妹(きょうだい)の末っ子の私を一番可愛がってくれていた母は、震災の前日、「迅の入試の結果は、しっかり二人で見に行こうね」と言ってくれていました。しかし、その夜、些細なことで喧嘩し、母に罵声を浴びせてしまいました。

3月11日、私は体調が悪く、学校を休むことにしました。母はそんな私のために、出かける予定を止め、家に残ってくれました。私と姉が母を一人家に残し外出していたとき、今までに感じたことのない大きな地震に襲われました。私と姉は急いで自宅に戻りましたが、母の姿はありませんでした。私たちは、母は避難したものだと考え、安全な場所にある父の職場に避難しました。

翌日、私は母を探しました。前日まであった私の街は変わり果て、家の周りには津波で亡くなった方々の遺体がありました。私は避難所を回り、母を探し続けましたが、ついに見つけることができませんでした。ある日、母と一緒に逃げていた友人家族と津波に流された、ということが私たち家族に伝えられ、やがて、その友人家族の遺体が見つかりました。私はその現実を受け入れることができませんでした。私の母は、今でも見つかっていません。

数日後、私は父に連れられ、入試の結果を見に行きました。可否を告げる掲示板に、私の番号がありました。

涙が止まりませんでした。私はそこに、母と一緒に行くはずでした。けんかなんかしなければ良かった。謝ることすらできなかった。産んでくれたことに、ありがとうと伝えることもできなかった。もっと、一緒にいたかった。私の頭の中に、母と過ごした幸せな日々が一つ一つ浮かんできました。自分がもっと素直にしていれば、母は助かったかもしれない。私は自分を責め、心の中で、ごめんね、ごめんね、と謝ることしかできませんでした。

そんなとき、ビヨンドトゥモローと出会いました。私と同じように震災の痛みを経験している学生たちが活動していると聞き、参加してみたいと思いました。

この夏、私は、ビヨンドトゥモローのプログラムで11人の仲間とアメリカに行きました。それまで、自分の震災の体験を話すことは正直言って嫌でした。周囲の人たちに距離をおかれてしまうような気がしていたからです。しかしアメリカで、先輩たちに背中を押され、スピーチをする機会をもらいました。すると、アメリカの人たちは涙を流しながら私の話を聞いてくれました。私には語る意味があるかもしれない、そう思うようになりました。私は、一人じゃない。辛い経験をした自分たちだからこそ、社会に伝えられることがある。ビヨンドトゥモローの仲間たちに、そう教えられました。

私は、これまで母の死について、ずっと後悔して生きてきました。しかし、今ここに「ないもの」を追いかけるのではなく、今確かに「あるもの」に感謝し、これから「生まれてくるもの」を信じて生きていきたいと思えるようになりました。私には夢があります。地域行政に関わり、東北を元気にしていくことです。これまで守られてばかりだった私ですが、これからは母の生きた証でもある自分自身や家族を大切に、誰かを守っていけるような人間になりたいです。それが母に感謝の気持ちを伝える、唯一の方法だと思います。



遠藤見倫 石巻専修大学経営学部2年(宮城県石巻北高等学校卒業)
千葉真英 慶応義塾大学総合政策学部1年(岩手県立大船渡高等学校卒業)

“この2年間、私はビヨンドトゥモローと共に歩んできたからこそ、もっと多くの人に知ってもらい、刺激になるような場にしていきたい”

(遠藤)

2年前、私は初めて東北未来リーダーズサミットに参加しました。部活の顧問の先生が勧めてくれたことがきっかけで応募しましたが、サミット参加者には知り合いもおらず、人見知りの私は果たして2泊3日乗り切れるのか、とても不安でした。

また、震災の後に受けた執拗なメディアの取材があり震災のことを話すことが嫌で、人間不信になっていました。でも、東北未来リーダーズサミットの会場に着いて、初対面のチームメンバーと顔を合わせた瞬間、「この人たちなら何を話しても大丈夫」と感じました。そして、その仲間たちは、私にとって今も唯一無二の存在になっています。

(千葉)

2年前、私は初めてサミットに参加しました。当時の自分はと言えば、今以上に寡黙で、あまり積極的なコミュニケーションが得意な方ではありませんでしたし、友人関係や高校時代の部活でやっていた陸上競技、そして受験勉強と言った、自分の身の回りにある問題にしか関心がなかった、ごく普通のどこにでもいる田舎の高校生でした。自分には特別な才能や大きなビジョンもなく、最初のサミットに参加したのも、強い社会への意識があったわけではなく、漠然と参加しました。その頃は、自分がそれからの2年間で得ることになる多くのチャンスを想像すらしていませんでした。

(遠藤)

サミットに参加してから、私は、この第3回東北リーダーズサミットまで行われてきたプログラムすべてに参加してきましたが、自ら進んで発言をするということではできない人間でした。そんな私を変えるターニングポイントとなったのは、昨年のTOMODACHIビヨンドトゥモロー米国サマープログラムです。

「英語でスピーチをしてみないか」

出発の2日前に事務局から電話がありました。海外にも行ったことがなかった私が英語でスピーチだなんて考えたこともなく、戸惑いましたが、「こんなチャンス二度とない」そう思い、「やります」と答えました。それまでは自分に自信がなく失敗を恐れてばかりで、何かに思い切ってチャレンジすることはありませんでした。しかし、アメリカで何度も何度も覚えるまでスピーチを練習し、つたない英語だったと思いますが、多くの人が私の言葉に耳を傾けてくれました。私はアメリカという土地が好きになり、また来たいと思うまでになっていました。そして今年の夏もアメリカへ行くチャンスをいただきました。新しい出会いと再会。そして、私たちに「遠いアメリカからあなたたちを応援している」と言ってくれました。去年と今年、2回のアメリカ研修で人との繋がりの大切さや想いを伝えることの大切さを学びました。そして何よりも、自分なら何とかできるという自信がわいてきました。

(千葉)

最初のサミットからの2年間、私も数々のプログラムに参加する機会を頂きました。そして、様々な出会いや体験を通して、もともと志した建設工学ではなく、人づくりというアプローチで東北を復興させたいと考え、一度入学した大学を退学し、今年の9月に慶応義塾大学総合政策学部に入りました。

これは、2年前の自分からは想像もできない変化です。チャンスを与えられることで、私は社会への関わり方が大きく変わりました。

(遠藤)

私はビヨンドトゥモローが今後入ってくる後輩たちにとってよき場所であつたら良いなと思っています。上辺だけの付き合いではなく、時にぶつかれる、意見が言える場であってほしいと思います。そのために、私たち一期生がもっとみんなのことを知り、他にない繋がり方で後輩たちをサポートしたいです。今年の夏、私はビヨンドトゥモローのオフィスでインターンをしました。自分たちの後輩が良い経験ができることを願い、封づけ作業や発送作業を手伝いました。自分のすることが役に立つということがうれしくて、インターンが終わった時、正直まだ石巻に帰りたくない自分がいました。

私は、大学を卒業してもビヨンドトゥモローには関わりを持ちたいと思っています。この夏にインターンしたように働きたいともっています。この2年間、私はビヨンドトゥモローと共に歩んできたからこそ、もっと多くの人に知ってもらい、関われなかったとしても、刺激になれるような場に、団体にしていきたいです。

“自分より辛い思いをしている人たちが、社会には沢山いる。その人たちの分まで頑張る使命が自分にはある”

(千葉)

僕は、震災後、本当に多くのチャンスをいただき、2年前の自分からは想像もできない自分になりました。同じように辛い思いをしている被災地の後輩たちに変化のチャンスを与えられる人間になりたいと思うようになりました。今回、3回目の東北未来リーダーズサミットを開催するにあたって、私は、ビヨンドトゥモローのインターン生として、東北の高校を回り、告知活動を行いました。震災で辛い思いをした自分だからこそ、同じような境遇にいる学生たちにビヨンドトゥモローを近づけることができるのではないかと考えたからです。

一方、辛いのは僕だけではありません。自分よりも辛い思いをしている人たちが、社会にはたくさんいます。同じ東北出身の被災者の中でも、私たちのように機会を得られなかった人がいます。そして、そのさらにその後ろ、日本中・世界中には、もっと辛い経験をしている人が沢山いるはずです。その人たちの分まで頑張る使命が自分にはあると思います。これから自分の等身大を少しずつ大きくして、進んでいきたいと思っています。



首相公邸での 提言提出

2泊3日間のプログラムで、未来のリーダーたちの手によって作られた、東北の未来への提言。提言発表会でゲストの投票によって選出された優秀チーム(チーム5)と、大学生事例研究チームは、首相公邸に招待され、安倍昭恵首相夫人に提言を届けました。



安倍昭恵 首相夫人

“これから生きていくのは、皆さんのような若い世代です。皆さんの提言が実現されるべく、応援していきたいと思います。大きな大きな夢を掲げて、日本中の人々の夢の象徴になっていってください。”



参加頂いた方々

宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

提言アドバイザー(1/3)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と思いの共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。



チーム1
藤沢久美
シンクタンク・ソフィアバンク代表

国内外の投資運用会社勤務を経て、1996年に日本初の投資信託評価会社を起業。99年同社を世界的格付け会社に売却後、2000年にシンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画。現在、副代表。03年社会起業家フォーラム設立、副代表。07年ダボス会議を主宰する世界経済フォーラムより「ヤング・グローバル・リーダー」に選出される。著書は、「なぜ、御用聞きビジネスが伸びているのか」など多数。

チーム2
船橋力
株式会社ウィル・シード ファウンダー
取締役会長

横浜生まれ、幼少期をアルゼンチン、高校時代をブラジルにて育つ。上智大学卒業後、伊藤忠商事に入社。ジャカルタ地下鉄推進プロジェクトなどアジアにてODAを活用したインフラ事業に携わる。2000年に株式会社ウィル・シードを設立。350社以上の大手企業や600校以上の学校教育現場に体験型教育プログラム、海外派遣型研修などを提供。現在は河合塾にて中高一貫の国際学校立ち上げ支援も行う。Beyond Tomorrow代表理事、Table for Two理事、中央教育審議会委員、2009年世界経済フォーラム、ヤンググローバルリーダー。



チーム3
松古樹美
野村ホールディングス株式会社
コーポレートシティズンシップ推進室長
マネージングディレクター

上智大学法学部卒業。野村総合研究所入社。ニューヨーク大学およびジョージタウン大学にてロースクール法学修士号取得。ニューヨーク州弁護士。日本企業と、そこで働く日本人がグローバル化する手伝いがしたい、日本発の発信をしたい、と思い続けて日本企業で早20年と少し。現在はグループのCSR活動の推進に取り組み、社会における企業の役割について考える日々。



チーム4
照屋朋子
NGOユイメール代表

大学時代、The Asian Law Students Association JAPANに所属し、日本代表としてワシントンDC、バンコク、イスタンブール等の国際会議に参加。貧困や社会問題について議論するだけでなく一点突破すべく、モンゴルに行き始める。大学院在学中に、孤児院「太陽の子ども達」倒産の危機に際し休学し、NGO設立。開発コンサルティング会社にてJICA中国独占禁止法整備支援プロジェクトを担当した後、現在に至る。早稲田大学法学部、上智大学法科大学院卒業。法務博士。2011年、世界経済フォーラム「世界を変えるリーダー30人」に選出。

参加頂いた方々

提言アドバイザー(2/3)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と意思の共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。



チーム5
杉山大輔
株式会社インターリテラシー
代表取締役社長/CEO

幼少期(3歳～15歳まで)を過ごしたニューヨークでの経験や、大学、ビジネススクールを通して世界のフィールドで戦えるコミュニケーション力・プレゼンテーション力・IT技術・会計知識を身につける。それらのスキルに加え、ネイティブレベルの英語力+Information Communication Technologyで、海外を含む企業や学校、団体のブランディング、web制作などコミュニケーションデザインを数多く手がけている。慶應義塾大学総合政策学部卒。慶應義塾大学ビジネス・スクール修了(MBA)。



チーム5
ハリス鈴木絵美
チェンジ・ドット・オーグ 日本代表

米国人の父と日本人の母の間に生まれ、高校卒業まで日本で育つ。米イェール大学卒業後はマッキンゼー&カンパニー、オバマ氏の選挙キャンペーンスタッフ、ソーシャルインキュベーター企業Purposeの立ち上げなどを経て、2012年にChange.orgの日本代表に就任とともに帰国。



チーム6
籠島康治
株式会社電通
ソーシャル・デザイン・エンジン・クリエイティブ・ディレクター

会社での広告制作のかたわら、ソーシャル・デザイン・エンジンの一員としてソーシャルなプロジェクトにクリエイターとして携わる。社外でもNGOとの協働でさまざまなコンテンツを発信する2025PROJECTの一員としてさまざまなプロジェクトで活動。九州大学、上智大学大学院非常勤講師、共著に「たりないピース」(宮崎あおい、宮崎将)「生き物たちへのラブレター」(滝川クリステル)「世界を変える仕事44」(Sweet Smile)など。



チーム7
堀田 真代
ソフトバンク株式会社

17歳で交換留学生として単身渡米。オレゴン州で1年間地元高校に通い、2004年カリフォルニア大学サンタバーバラ校を卒業、ソフトバンク株式会社に入社。同社では、事業計画作成、投資、会社設立、株式譲渡、新規事業の立ち上げ等、経営企画や財務業務を経て、東日本大震災後は復興支援に関わる。現在主導しているTOMODACHI ソフトバンク・リーダーシップ・プログラムは、米国大使館と米日カウンシルと共同実施する、被災地の高校生をカリフォルニア大学バークレー校のリーダーシップ研修に招待するもの。同プログラムには昨年は300人、今年は100人が参加。

参加頂いた方々

提言アドバイザー(3/3)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と意思の共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。



チーム8
岡島悦子
株式会社プロノバ 代表取締役社長

商社、外資系経営コンサルティング会社を経て、経営人材紹介サービス会社立上げに参画。2005年より代表取締役。2007年に独立し、「経営のプロ」創出のシンクタンクであるプロノバ設立、同代表取締役社長就任。ベンチャー企業、再生中の企業に対し、年間約100名の「経営のプロ」人材を紹介。経営チーム組成アドバイスや次世代経営者育成アドバイスなど、経営者のディスカッションパートナーとして豊富な実績を保有。

チーム9
矢部寛明
一般社団法人アショカ・ジャパン
ユースベンチャープログラムリーダー

2011年早稲田大学を卒業。震災後、内定先の会社を辞退し気仙沼入り。物資支援、被災地区にあったホテルの再営業支援、学習支援を行う。現在は、東北を中心に「何かしたい」と強く思う若者をサポートし、イノベーターを数多く育成、輩出している。座右の銘は「行動はメッセージ」。



大学生事例研究チーム
原聖吾
マッキンゼー・アンド・カンパニー

東京大学医学部、スタンフォード大学経営大学院卒業。国立国際医療研究センター(国立国際医療センター:当時)を経て2007年に日本医療政策機構へ参画。生活習慣病、グローバルヘルス(国際保健)プロジェクトの立ち上げに携わる。現在マッキンゼー・アンド・カンパニー勤務。医師というバックグラウンドを活かしながら、様々なステークホルダーを巻き込んだ医療課題の解決に貢献すべく、政策立案、ビジネス、NPO/NGO活動など多岐に渡る領域での活動に取り組んでいる。

チーム10
岩瀬大輔
ライフネット生命保険株式会社
代表取締役社長兼COO

1976年埼玉県生まれ、幼少期を英国で過ごす。1998年、東京大学法学部を卒業後、ポストン・コンサルティング・グループ、リップルウッド・ジャパン(現RHJインターナショナル)を経て、ハーバード経営大学院に留学。同校を日本人では4人目となる上位5%の成績で卒業(ペイカー・スカラー)。2006年、副社長としてライフネット生命保険を立ち上げる。2013年6月より現職。世界経済フォーラム(ダボス会議)「ヤング・グローバル・リーダーズ2010」選出。株式会社ベネッセホールディングス社外取締役

メディア掲載

新聞

- 「被災の高校生、未来を語る 来月12日からサミット」
(福島民報 2013年9月1日)
- 「高校生が復興議論 サミット参加募る」
(岩手日報 2013年9月1日)
- 「復興は自らの役割」
(電気新聞 2013年9月11日)
- 「参加高校生を募集 リーダーズサミット」
(東海新報 2013年9月12日)
- 「若者が考える東北の未来 東京でサミット」
(岩手日報 2013年10月14日)

ウェブサイト

- 「『東北の未来を創るのは自分たち！』被災地の高校生が復興策を提言」
(リクナビ進学ジャーナル)



合唱

未来へ

ほら 足元を見てごらん
これがあなたの歩む道
ほら 前を見てごらん
あれがあなたの未来

母がくれたたくさんの優しさ
愛を抱いて歩めと繰り返した
あの時はまだ幼くて意味など知らない
そんな私の手を握り
一緒に歩んできた

夢はいつも空高くあるから
届かなくて怖いね だけど追いつけるの
自分の物語だからこそ諦めたくない
不安になると手を握り
一緒に歩んできた

その優しさを時には嫌がり
離れた母へ素直になれず

ほら 足元を見てごらん
これがあなたの歩む道
ほら 前を見てごらん
あれがあなたの未来

その優しさを時には嫌がり
離れた母へ素直になれず

ほら 足元を見てごらん
これがあなたの歩む道
ほら 前を見てごらん
あれがあなたの未来

ほら 足元を見てごらん
これがあなたの歩む道
ほら 前を見てごらん
あれがあなたの未来
未来へ向かって
ゆっくりと歩いて行こう





協力団体

本プログラムは、ジャパン・ソサエティーの助成によって運営されています。
ビョンドトゥモローの事業は、多くの方々からのご支援によって支えられています。
皆様のご支援・ご協力に、感謝申し上げます。



ビョンドトゥモロー ストラテジック・パートナー

ビョンドトゥモローの活動に1000万円相当以上のご寄付を
いただいた企業・団体

- ジャパン・ソサエティー
- 武田薬品工業株式会社
- パンクオブアメリカ・メルリンチ
- 米日カウンシル
- 三菱重工業株式会社

ビョンドトゥモロー プロジェクト・パートナー

ビョンドトゥモローの活動に100万円相当以上のご寄付を
いただいた企業・団体

- 株式会社アルビオン
- ap bank Fund for Japan
- KPMG ジャパン
- 住友化学株式会社
- 公益財団法人 東日本大震災復興支援財団
- 日本GE株式会社 GEキャピタル
- プロジェクトホープ
- 米日財団
- 株式会社ポイント
- ポストン東北緊急支援ファンド
- ロート製薬株式会社

ビョンドトゥモロー プロボノ・パートナー

ビョンドトゥモローの活動に商品・サービスの形でご寄付・
ご協力をいただいた企業・団体

- 株式会社アゴス・ジャパン
- あずさ監査法人
- 株式会社海外教育コンサルタンツ
- 株式会社ガリバーインターナショナル
- キンコーズ・ジャパン株式会社
- コニカミノルタビジネステクノロジーズ株式会社
- 全日本空輸株式会社
- 株式会社リクルートホールディングス

ビョンドトゥモロー・マネジメント・パートナー

ビョンドトゥモローの組織運営に関わる人材を、長期的に派遣
していただいている企業・団体

- 株式会社アルビオン
- ロート製薬株式会社

夏季グローバル研修欧州プログラム特別パートナー

ビョンドトゥモロー夏季グローバル研修2013欧州プログラム
開催に際してご協力をいただきました

- エアバス

その他ご寄付をいただいた皆さま

- 株式会社ウェルネス・アリーナ
- サルサンパ会
- GE Power & Water リーダーシップアワード・メンバー同
- 野村證券 人事部 ダイバーシティ&インクルージョン社員ネットワーク
- 香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部

ビョンドトゥモロー スカラーシップ・パートナー

奨学生枠の提供をいただいた教育機関・教育団体

- Leelanau School (米国・ミシガン州)
- Leysin American School (スイス・ヴォー州)
- St. George's School (スイス・ヴォー州)
- St. Michael's College (英国・ウスターシャー州)
- St. Timothy's School (米国・メリーランド州)

ビョンドトゥモロー スカラーシップ・パトロン

ビョンドトゥモロー・スカラーシップ・プログラムに奨学金枠を
ご寄付いただいた個人の方々

- 大塚 太郎 様
- 小林 正忠 様
- 佐藤 輝英 様
- 船橋 力 様
- 本庄 竜介 様
- 松本 大 様
- ロバート・アラン・フェルドマン 様

※上記には、2013年10月時点でご支援・ご協力頂いて
おります皆様を掲載させて頂いております。

ビヨンドトゥモロー とは



概要

「ビヨンドトゥモロー」は、東日本大震災で被災した若者がグローバルに活躍するリーダーへの成長を支援することを目的とした事業として、包括的なリーダーシップ支援事業を実施しています。2012年度には、「TOMODACHIサマー2012 ビヨンドトゥモロー米国プログラム」「東北未来リーダーズサミット2012」「TOMODACHIビヨンドトゥモロー・グローバル・リーダーシップ・アカデミー」「ビヨンドトゥモロー・スプリングプログラム2013」などを開催、2013年度には「ビヨンドトゥモロー欧州サマープログラム」「TOMODACHIビヨンドトゥモロー米国サマープログラム」を開催。被災地からリーダー候補を輩出するための取り組みを行っています。

また、大学進学者を対象として奨学金及びリーダーシップ教育を提供する「ビヨンドトゥモロー・大学スカラーシップ・プログラム」や「ビヨンドトゥモロー・東北未来フェローズ・プログラム2013」、高校生を対象として海外のボーディングスクールへの留学機会を提供する「高校留学プログラム」を運営しています。

特徴

志ある学生の夢の実現を応援し、金銭的な支援だけでなく対話を通して大志の実現を助け、グローバルな視野を持つ人材を育成します。また、今回の逆境を乗り越えて、自らがより主体的に社会に関わることができるような機会を提供することにより、他者に対する共感力をもつ人材の育成を目指します。

内容

1. 奨学金プログラム

東日本大震災という困難を経験した若者こそ、今後、世界や日本、そして東北復興のために行動するリーダーになる資質を有していると信じ、進学のための奨学金（返済不要）を給付しています。

- 大学スカラーシップ・プログラム
- 東北未来フェローズ・プログラム2013
- 高校留学プログラム

2. リーダーシップ育成プログラム

東北被災地からリーダーとしての活躍を志す学生たちの視野を広げ、人間的成長を促すリーダーシップ育成プログラムを開催しています。その領域は、世界・日本・地域へと広がり、広い視野と強い共感力をもって社会革新の原動力となる人材の輩出を目的としています。

撮影協力: 神戸芸術工科大学 infoGuild
遠藤見倫・佐藤滉
(ビヨントゥモロー大学スカラーシップ・プログラム参加者)

デザイン・レイアウト協力: 中河綾子



一般財団法人 教育支援グローバル基金
<http://www.beyond-tomorrow.org/>

〒150-0041
東京都渋谷区神南1-5-7
APPLE OHMIビル5階 ETIC. 内
info@beyond-tomorrow.org

©一般財団法人 教育支援グローバル基金